



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 283号 2011.3.4 発行 社会政策研究所

=====

前2号連続でボリュームのある記事を掲載しましたので、今号でちょっと一息。知的障害の感性に着目したニュースをいくつかお届けします。【kobi】

障害者が創る先端デザイン

日経ビジネス 2011年2月28日号 64ページを一部再編集

知的障害者の創作物を取り入れた商品の売れ行きが好調だ。インターネットを通じて評判が広まっている。

かわいらしい動物などのイラストが描かれている段ボール。手がけたのは、九州の福祉施設で働く知的障害者だ。この段ボールは「だんだんボックス」と呼ばれ、障害者の自立支援や地域活性の一環として、昨春に構想が練られた。販売は8月下旬から始まった。

小さなものから特大サイズまで4種類の大きさ、6種類のデザインを用意。価格は1つ200円から400円と手頃だ。個人がギフト用に使うだけでなく、地元九州を中心に、企業が採用するケースが目立っている。

販売額の10%が印税としてアーティスト（デザインした障害者）や福祉施設に還元される。また、売り上げから経費などを差し引いた収益もまた、すべて福祉施設などへ回る仕組みだ。

だんだんボックスを企画したNPO法人（特定非営利活動法人）匠ルネッサンスの神崎邦子代表は「チャリティーやイベントという一過性のものではない。持続的な経済活動を通して、障害者の自立を支えたい」と語る。



側面にイラストが描かれた「だんだんボックス」と、横浜ランデヴープロジェクトが生んだ「マサコちゃんの時間」のトートバッグとポーチ

（写真右：Woolman）

クリエイターが磨いて商品化

ギャラリーや雑貨店などが入る東京・表参道の複合文化施設「スパイラル」を営むワコールアートセンターもまた、知的障害者の創作物を活用した商品を企画・発売している。雑貨店では、洗練されたデザインの家具や雑貨を取り扱うことで知られている。

昨年、同社は横浜市の文化施設「象の鼻テラス」で開催している「横浜ランデヴープロジェクト」で企画・運営の一部を任された。このプロジェクトは「アートの実社会への応用」がコンセプト。その一環として障害者が働く地域作業所と、著名なクリエイターを結びつけて製品を開発する試みが始まった。

クリエイターが協力し、障害者が持つセンスに磨きをかけて商品化する。中でも、売れ行きが好調なのが、「マサコちゃんの時間」シリーズだ。

横浜のNPO法人「空」が運営する地域作業所「風のバード」で働くマサコさんが織る色彩豊かな生地を活用。ファッションデザイナーの矢内原充志さんがトートバッグを作った。価格は7560円と決して安い価格ではない。

だが、「6月から販売を開始したが反応がよく、10月から新アイテムとしてポーチも展開するに至った。納品と同時に売れていく状況」とワコールアートの小泉智子さんは語る。マサコちゃんの時間は、スパイラルのインターネットショップでも購入可能だ。洗練されたデザインの商品が並ぶ中で、堂々と肩を並べる存在となっている。

「自分の商品が売れたり、注目されたりすると、みなさんのモチベーションが急上昇した。作業効率が倍になった人もいます」と、矢内原さんは売れ行き好調によるうれしい副次効果を語る。

障害者の作る物は、施設がバザーで販売するのがほとんど。そこにクリエイターの磨く力が加わることで、高付加価値な商品になる。

「かわいそうだから買う」ではない。相応の対価を払うという資本主義の原則にのっとった当たり前の行為がそこにはある。高い品質で、買う人も気持ちよく、使う人の心も温まる。売れ行き好調の背景には、ブランド物を持つ所有欲ではなく、「心を満たす消費」の渴望が消費者にあるのかもしれない。

障害とは何かを問い直す 健常者と共同制作 エイブルアート展



西日本新聞 2011年3月4日
大型スクリーンに映し出されているエイブルアートの映像作品

芸術活動を通じて人と人をつなぐ「エイブル・アート2011『Life map』展」(福岡市文化芸術振興財団など主催)が博多リバレイン(同市博多区)のギャラリーアトリエで開かれている。7回目を迎える今年のメインは、障害者と健常者が障害者の日常生活に焦点をあて共同制作した映像作品。「見る者の障害者観を揺さぶり、障害とは何かを問い直

す良作」と来場者の間で話題になっている。27日まで。

福祉施設の工房で熱心に絵を描く人、植物園で清掃活動に汗を流す人、車いすに座って楽しげにもちをつくる人...。会場に設置された縦2メートル、横7メートルの大型スクリーンに、木材リサイクル工場や福祉施設で働き、作品づくりに没頭する障害者たちの姿が映し出される。映像作家、泉山朗士さん(36) = 福岡市 = が撮影した16分間の作品。BGMは、作曲家の湯山千景さん = 東京 = が担当した。

2人の健常者と共同で制作に関わったのは、障害福祉サービス事業所「工房まる」(同市

南区)を利用する浜野歩さん(28)。「何かを見つけたり、特になかったり...。今日はどんな日になるのかな」...。味のある節回りで自作の詩を、映像に合わせて朗読する。

車いす生活の浜野さんが工房に通い始めたのは10年前。当初、工房での木工や工芸活動になじめなかったが、日常生活で感じるいら立ちや愚痴を面白おかしく言葉にしたのを機に「詩作」という表現方法を手に入れた。

そんな浜野さんを泉山さんらに引き合わせたのは、まる代表理事の樋口龍二さん(37)。「それぞれの個性が化学反応を起こすと期待した」

浜野さんと泉山さんは昨年11月から2カ月間、まるを含む福岡や佐賀県内の福祉施設を訪問。そこで活動する障害者たちの様子取材、撮影した。施設に足を運んだ経験がほとんどなかった泉山さんは、人々がその人らしく日々を送る姿を見て「障害者に対するイメージがいかにステレオタイプだったか思い知らされた」と話す。

6日は、湯山さんの音楽に合わせて浜野さんが詩を朗読したり、制作の裏話を話す公開リーディング&ギャラリートークがある。樋口さんは「障害者が加わって作り上げた作品」という既成概念を持たず、純粹に楽しんでほしい」と呼び掛けている。入場無料。問い合わせは同アトリエ=092(281)0081。

「夢の国」描き最優秀賞 障害者対象公募展 東近江・古久保さん

読売新聞 2011年3月4日

草津で7日まで展示「画家目指しさらに大作を」

最優秀賞を受賞した「未来の上海ディズニーランド」
「超大作」の制作に
取り組む古久保さん
(東近江市中野町で)



障害のある人を対象にした芸術公募展「2010年度かんでんコラボ・アート21」(関西電力主催)の最優秀賞に、県立八日市養護学校高等部1年、古久保憲満(のりみつ)さん(16) = 東近江市中野町 = の絵画「未来の上海ディズニーランド」が選ばれた。「作家活動の登竜門」とされるコンテストで、古久保さんは「画家デビューを目指し、さらに大作を描く」と意気込む。(山下陽太郎)

古久保さんは小学1年で「高機能自閉症」と診断された。聴覚過敏などにより大勢と一緒に過ごすのが苦手で、対人関係がうまく築けなかった。同級生の何気ない一言で、「嫌われた」と泣き叫んだこともある。

だが、絵を描くと無心になり、集中できた。父満さん(51)と母雅美さん(43)は「思い切り、描かせよう」と、お絵描きノートを持って毎日、登校させた。

学校では、鉛筆やボールペンで車やビルなどを描き続け、1日で1冊を使い切ることも。使ったノートは数百冊に上るといふ。絵は成長とともに、線が増えて緻密になり、色鉛筆などで彩られるようになった。

入選作は縦1・57メートル、横1・21メートル。建設が計画されている上海ディズニーランドをイメージし、昨年夏休みに約1か月半をかけて制作した。絵は城やジェットコースター、ホテルなど大好きなもので埋め尽くされ、「自分の行きたい夢の国ができた」と笑う。

審査員からは「迫力満点で、作者の思いがあふれた作品」との評価を受け、応募105

7点の頂点に。雅美さんは「描き続けたことが力になった。障害のある子を持つ他の親に、『やればできる』という励ましになればうれしい」と語る。

現在、縦10メートル、横1・2メートルの 超大作 を制作しており、「『よく、これだけ描けるなあ』とびっくりされるような作品に仕上げたい」と話している。

古久保さんの作品を含む入選作24点が「イオンモール草津」(草津市新浜町)のイオンホールで、7日まで展示されている。入場無料。問い合わせは関西電力滋賀支店(077・532・0072)。

検察検討会議：知的障害者は可視化優先 委員から意見多く

毎日新聞 2011年3月3日

検察改革を議論する法相の私的諮問機関「検察の在り方検討会議」は3日の会合で、知的障害者の取り調べについては優先して全過程の録音・録画(可視化)を導入すべきだとの意見が多くの委員から出た。問いかけに迎合的になりがちで、事実関係の確認が困難とされる特性に配慮を求める導入論が相次ぎ、今月末に取りまとめる提言の軸の一つになりそうだ。

作家の吉永みち子氏は「運用でただちに取り組むべきは、知的障害が疑われるケースでの取り調べ」と指摘。「コミュニケーション能力に問題があるが、日ごろ接している福祉関係者ならば、何を言おうとしているか分かる。全面可視化に加え、福祉関係者の立ち会いも認めるべきだ」と訴えた。

これについて原田国男・元東京高裁判事も「裁判官当時、加害者、被害者ともに知的障害者の事件を担当したが、ものすごく難しくて無罪にした。知的障害者の全面可視化は持ち出してもいい」と支持。但木敬一・元検事総長も「私も知的障害者の連続放火事件を受け持ったが全部認めてしまう。(やり取りが難しく)調書に本来ならないものを調書にしている時点で無理があり、検察に考えてもらいたい」と述べた。

障害者の取り調べを巡っては、今国会提出予定の障害者基本法改正案が、刑事手続きでの障害への配慮規定を盛り込む方針。ジャーナリストの江川紹子氏は「知的障害のある人が刑事手続きではたくさんおり、中には冤罪(えんざい)の疑問が持たれるケースもある。優先的に可視化を考えないといけない」と強調した。【石川淳一】

たまには太陽の子・手をつなく、たまにはつなくちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなく育成会 社会政策研究所発行